

# 浜松地域の不登校支援の情報拠点及び居場所支援に関する研究

浜松学院大学 現代コミュニケーション学部 子どもコミュニケーション学科

指導教員：准教授 笥有子

参加学生：馬塚 倭空、山本 扇音、福井 健吾、一ノ瀬 龍星、阿部 壮太郎、田中 美有、村上 咲里那、寺田 圭歩、山下 望来、大橋 真季、宮城 チエミ、油井 美空、佐々木 心優

## 1 要約

本研究では、浜松地域の不登校児童生徒への支援として、教育関係者と大学生が協働し、アート活動を通じた居場所作りと情報提供に取り組んだ。5月から10月まで計4回の定例会を開催し、様々なアート活動を実施した。アート活動では、触覚的な活動や言葉遊び、季節に合わせた食育、ペインティングなど多様なテーマを設定した。また、大学の文化祭や市民交流フェスタにて活動展示やワークショップを行い、不登校に関する認知調査も実施し、調査の結果から不登校への理解促進の必要性も示唆された。さらに、12月には適応指導教室の見学も行った。本研究の今年度の成果として、アートや食を介した子どもたちの個性や能力に着目することや、自分らしく過ごせる場所のデザインを検討することに意義があると明らかになった。

## 2 研究の目的

文部科学省（令和5年度）によると、全国の小中学校不登校児童生徒数は過去最多の34万6482人である。また浜松市（令和3年度）の小中学校不登校児童生徒は1,903人、前年度より約29%増となっており、全小学生の1.5%、全中学生の6.1%と全国平均よりやや高い割合となっている。教育機会確保法（2016）により、不登校児童生徒の個々の状況に応じた必要な支援を行うことが求められているが、現時点で支援は限られており、該当する子供や保護者の孤独感、学業の遅れや将来に対する不安は想像される場所である。この課題に対し保育・教育に関する学科の図画工作・造形を専門とする教員が指導者となり、関心の高い有志学生と共に浜松地域での不登校支援について地域貢献活動を行う。

## 3 研究の内容

教育関係者と不登校支援に興味を持つ学生が集まり、不登校児童生徒とその保護者がアート活動を行える定例会を提供した。加えて、昨年同等に情報共有が行われる場としても活用された。この定例会は、5月、7月、9月、10月の計4回行われた。場所は浜松学院大学の教室または会議室で、時間は13時から15時とした。定例会では、アート活動スペースと情報収集及びピアサポートスペースの二つを設けた。アート活動では、毎回一つの活動テーマを学生が決め、学生がファシリテーターとなって実施した。アート活動が取り入れられている理由として、形を創作し、色を置くことに正解はなく、誰にとっても参加しやすいこと、手を動かすことで話題を切り出しやすく、参加者間の心の距離を縮めることが期待されることが挙げられる。情報収集及びピアサポートスペースでは、会話の活性剂的な役割としてお菓子と飲み物を用意し、不登校支援やアートに関連した書籍も置い

た。

アート活動で実施したテーマは、「スライム・小麦粉粘土」「言葉遊び」「(シャーベットを用いた)食育」「ペインティング」であった。5月に実施した「スライム・小麦粉粘土」では、スライムや小麦粉粘土を用いて創作することで、視覚的な楽しさだけでなく触る楽しさもあり、初対面の参加者同士で会話がしやすいような工夫を図った。7月に実施した「言葉遊び」では、用意した数十冊の本から複数の単語を選び組み合わせ、創作した言葉を段ボールに絵を描いて表現するといった挑戦的な内容であった。9月に実施した「食育」では、シャーベットを食塩と氷を用いて作り、科学実験的であり季節に沿った全世代が楽しめる企画となり、参加者間の交流促進を図った。10月に実施した「ペインティング」では、コップやビニール手袋、ガラス瓶などに着色し光を当てることで秋を彩る企画であった。

また、11月に浜松学院大学、静岡文化芸術大学の両大学の文化祭にて今年度の活動をまとめた展示と和紙染織のワークショップを実施した。さらに、イオンモール志都呂にて9月に行われた『市民交流フェスタ2024～みんなで学ぶSDGs～』にも出展し、同様のワークショップを行った。これら出展の目的は、より多くの人に本活動自体を広く知ってもらい参加するきっかけを作ること、不登校の当事者以外の方に不登校支援への関心を持ってもらうことであった。文化祭での展示スペースでは、本年度のアート活動で作った作品群の展示に加え、定例会と同様の会話ができるスペースを設置した。動員数は、浜松学院大学が1日間で約100名、静岡文化芸術大学が2日間で約400名であった。イオンモール志都呂では、ワークショップ参加者は約170名であった。

この際、参加者には和紙染織の「体験キット」をお土産として持ち帰ってもらった。これは、不登校児童の新しい場所に対する心理的な抵抗感などを加味した中で、できるだけ多くの児童に図画工作の活動に触れてもらうためのシステム構築を検討する中で生まれた方法である。例えば、保護者が会場に来て図画工作の実践に触れることができるが児童生徒本人が来られない場合、来ることは出来たがその場では実践に参加できない場合など、様々な状況が想定されるため、心理的に安心できる場所である自宅で材料用具を見てもらい、興味関心が高まった時点やそれぞれが活動に対する意欲が湧いた時点で活動してもらうことができるよう配慮した。

同時に、これら3つの機会にて、不登校に関する認知調査を筆記アンケートとウェブアンケートで実施した。その結果、計58件の回答を得た。このアンケートは、浜松地域での不登校支援の在り方を探り、今後の活動に活かすことが目的であった。

アンケートの設問は筆記、ウェブと共通であり、集計した回答は次の通りである。

- 
1. 年齢について…「現在の年齢はおいくつですか」という設問では、30代が最も多く36%、20代、40代が続いて順に25%、24%であり、回答者の多くが子育てに関わる世代であることが分かる。
  2. 職業について…「現在のご職業は何ですか」という設問では、最も多い回答は会社員(35%)であり、次に学生(26%)、パート・アルバイト(13%)と続いた。
  3. 住所について…「今日はどちらからお越しですか」という設問では、浜松市中央区が最も多く70%であり、回答者全体の91%が県内であった。
  4. 不登校関連の認知度について…「不登校のニュースや話題をよく耳にしますか」という設問。73%が「はい」と回答した。

5. 続…『文部科学省が定める「不登校児童生徒」の定義を知っていますか』という設問では、84%が「いいえ」と回答した。
6. 続…「令和4年度現在、全国の小中学校に約30万人の不登校児童生徒がいることをご存じでしたか」という設問では、73%が「いいえ」と回答した。
7. 不登校に対する印象を尋ねた設問では20件の記述式回答を得たが、不登校自体を否定するような回答は少なく、「つらい」や「難しい」といった言葉が見られた。
8. 不登校の原因について…「不登校になる原因は何だと思えますか」という設問。「いじめ」や「学校が合わない」といった原因を選ぶ回答者が8割以上であった。
9. 「不登校の子は学校に行くべきだと思いますか」という設問では、「行くべきだと思う」と回答した人は6%であり、「わからない・どちらとも言えない」と回答した人は53%であった。
10. 不登校支援に関する施設について…適応指導教室（校外学びの家）を「よく知っている」または「知っている」と回答した人は26%であったが、フリースクールについては47%であった。
11. 「ワンダーワンダーに参加したいと思いましたか」という設問については、「思った」「少し思った」と回答した人は51%であった。

10月には、静岡大学附属浜松中学校の総合学習の時間に不登校支援をテーマに探求学習をしているグループ4名との交流会を行った。また12月には、不登校支援とアートといったテーマで活動を展開している実例を知るため、磐田市の教育支援センター「あすなろ」への見学とセンター長へのヒアリングを行った。「あすなろ」の運営規模や日々の活動内容、設備等を知り、訪問支援から着手していること等の特徴も知ることができた。よって、昨年度の活動から認知したことを加えて、磐田市と浜松市の不登校支援の比較が可能となった。また、キャンドル製作の活動を見学し、活動を支える準備や児童生徒と信頼関係を築くための職員の対応を学び、「食育」「モノづくり」といった今後の活動に活かせるキーワードも得た。

## 4 研究の成果

### (1) 当初の計画

浜松の複数大学の学生の多様な専門性に立った視点で、一般市民の方々との下記A～Cの共同的な活動を通して、実践活動及び検証を行う計画であった。

- A. 5月から11月の間に大学内に不登校児童生徒及び保護者が訪れることのできる時間を提供し、フリースクールや適応指導教室に向かう前段階の居場所としてものづくりを楽しんだり、情報収集や相談ができるようにする。
- B. 大学の夏季休業に外部の事例を検討するためにフリースクールを訪れ、インタビューを行う。
- C. 浜松学院大学学園祭にて、保護者・関係者の交流会を実施し情報提供を行う。

### (2) 実際の内容

Aは、予定通り実施した。Bは、台風の天候不順等で予定が合わず、夏休みにフリース



学園祭での展示風景

クールを訪れる活動が実施できなかった。そこで12月に磐田の適応指導教室を訪問した。Cは、浜松学院大学学園祭だけでなく、静岡文化芸術大学学園祭での2日間の展示、また浜松市内の総合商業施設（イオン）の市民交流フェスタにてイベントブースを開催した。

### (3) 実績・成果と課題

主な活動実績については、3の研究内容を参照されたい。本活動は2年目になるが、今年度は複数大学の学生が関わることによって保育/教育と芸術/文化の領域を跨いだ学際的な活動を行うことができた。また不登校及びその支援についてアンケート形式で一般市民への意識調査を行うことができた。

### (4) 今後の改善点や対策

不登校の居場所支援については、浜松市内には徐々に新しい様々な活動が現れつつある。これらの活動を行う人々との情報共有や芸術文化をテーマに子供達を支援する意義を一般に周知する方法を検証する。

## 5 課題提出者・地域への提言

活動の中で、①不登校の子どもたちを「医療」「福祉」「特別支援」などの視点で「支援が必要な存在」として捉えるだけではなく、アートや食を通して彼らの元々持つ個性や能力にクローズアップして考えること、②不登校の子どもたちが自分らしく過ごせる場所のデザインとはどのようなものであるかを検証していくこと、に大きな意義があると考えた。今後もこれらの提案について言語化したり、空間作りを通して具現化し、伝えていきたい。

## 6 課題提出者・地域からの評価

浜松学院大学の「ワンダーワンダー」という活動に参加させていただき、大変貴重な経験をすることができました。特に、不登校問題を探求授業のテーマに掲げている中学生と大学生が話し合う場面や、フリースクールの生徒たちとの交流、そしてアートを通して自分を表現する作品づくりは貴重な体験でした。中学生たちは、不登校というテーマについて真剣に向き合い、自分たちなりの視点や考えを共有していました。その姿から、自分の抱える課題に対する真摯な姿勢と学びへの意欲を感じ、非常に刺激を受け、自分たちができることをニーズから見つけ出し探求授業への発表へとつながりました。一方、大学生の先輩たちは、中学生の意見を丁寧に聞きながら、自身の経験をもとにアドバイスをしており、そのサポートの仕方やコミュニケーションの取り方がとても参考になりました。

さらに、アートを通じて不登校問題にアプローチするという新しい視点には特に感銘を受けました。絵画や音楽、表現活動を通じて、自分の気持ちや考えを伝える方法は、言葉ではうまく伝えられない思いを形にする力があると感じました。アートを活用することで、学校に行かない子どもたちが自分の居場所を見つけたり、新たな自己表現の機会を得たりする可能性が広がるのではないかと思います。この活動を通じて、不登校問題についての理解が深まるとともに、人と人が直接つながることの重要性を再確認しました。異なる年代や背景を持つ人々と関わることで、多様な視点や考え方を学ぶ機会となり、非常に有意義な時間を過ごせたと感じています。アートの力を活かした新しい試みにも大きな可能性を感じ、今後の我々の取り組みにも生かしていきたいです。（一般社団法人 SoZone 深澤康伸）